東京都家庭薬工業協同組合会報

第13号

かていやく

昭和44年3月10日

題字・藤井得三郎氏

家庭薬人の自覚

理事長
津村重舎

家庭薬なる言葉が使われるようになるまでには思えばいろいろと紆余曲折があった。長年前のことだが業界の整理統合が行われつつあったとき先日亡くなられた藤井さんたちと売薬では意味がおかしいではないかということになり色々考えた末、家庭に常にあり安心して使ってもらえると言う意味で家庭薬が良かろうということに衆議一決して改めたと思う。其の当時の方々の顔が今でも思い浮んで来る。我々の生活の中の一つの深い皺である。戦後の物資の無い時代本当に良く売れた。現金で飛ぶように売れたものである。それが金融政策の変更によって順位丙となり、それは軍需品で無かった事が大きな原因であったようだが、手形の販売に切り変えたのである。私等は手形は倉庫にしまっておくものと思っていたのでどうも心がすすまなかったし取扱い方にも戸惑ったが、今思えば其の時頑張って現金一本で押通して来られた企業が今日大を為して居る企業のように思うと物事の転機と言うものは先の見通しが大切なことが良く解る。今もって残念である。こんな急変をも乗り越えて来た家庭薬であるのに何となく軽視されて居ると思われる点が多々あるのは

どうしたことか。新らしい薬が出ればその使用経過も注意し、人気も確かめ、良ければ家庭薬の中に取り入れるようにして内容も改良を加えてきているのにもかかわらず名前が古いということで内容も古いというように誤解をされて居る面もある。また何処の薬屋さん薬局さんに行っても一定の品質のものが安心して買えるものがかえって軽く見られる原因にもなり、誰にでも安価に買えるという面を気付かずに居られる点等も消費者側から見ての長所をもつと強く打出すべきではないか。

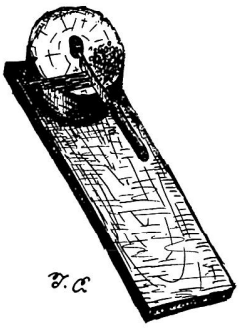
このような点を強くうったえる良い言葉は無いものだろうか。色々考えて今年もなかなかに困難な年であると予想される。

再販の問題も販売対策委員会の奮闘で刻々に状況をつかみ対処出来業界全体としての動きと一体となり活動をし先日公取から発表された次第である。再販の問題も大きな問題である。組合全体として取り上げるべきではないか。日薬連改組の問題も一応答申が出され今後時間をかけて無理のない運営の為の細部に入るのであるが答申の中で大切な言葉は民主的運営ということである。世界にその比を見ない戦争放棄という憲法を持った国の民主主義であり、理想的に運営される筈である。

民主主義という言葉を聞くと私はいつも彼の有名なロダンの彫刻を思い出す。近代美術館の広場にあるカレーの市民である、民主主義市民と言う連想であると思うが確かに何かを意味していると思う。或る時の指導者の姿の一つとしてであろうか。市民としての信頼と団結という意味であろうか。

〈座談会〉

漢方薬よもやま話



御出席者

土田茂雄氏
(株)紀ノ国屋漢薬局社長

高橋国海氏
中将湯ビル診療所

津村重孝氏
(株)津村順天堂専務

玉置新治氏
玉置薬業(株)専務

千葉胤頼氏
(株)千葉三郎次商店

司会

堀内伊太郎氏
(株)堀内伊太郎商店社長

堀内　どうも皆さん、きょうはお寒いところ、お忙しいのにかかわらずご出席いただきましてありがとうございました。きょうお集り下さいましたのは、いずれも漢方薬生薬界のお歴々の方ばかりでございます。中将湯ビル診療所の高橋先生は、毎日患者さんをじかにご覧になりますし、いろいろ調剤のお仕事をやっていらっしゃる、また、紀ノ国屋漢薬局の土田社長は、生薬を調合した漢方薬について、毎日店頭にお立ちになって、いろいろ実際上のお仕事をやっていらっしゃる。こういうお二人を中心にしてわれわれ薬業界でも特に漢方薬に詳しい方、津村順天堂の専務さんは生薬のことについて十分な知識をお持ちになり、いろいろと新しい業界の動きについて詳しい方であり、先般中国の漢薬と生薬について現地調査されましたし、玉置製薬の玉置専務さんは、生薬協会ではもう古くから指導者的な存在でございます。特に文学と薬草についてのご研究などは非常にお詳しい、業界でも得難い方でございます。また千葉三郎次商店の千葉さんは、もとから漢方薬を中心とした製品を作っていらっしゃいますが、特に最近ティバッグのような形にした漢方薬を開発されまして、新しい研究をなさっていらっしゃいます。そういうわれわれ業界の中でも特に生薬に関して知識のあるものが、きょうおいでいただいたお二方の先生にいろいろ面白いお話、参考になるお話をうかがったら、家庭薬組合の皆さんも非常に得るところがあると思いますので、この企画を立てたわけです。

左から　津村氏、玉置氏、高橋氏、土田氏、千葉氏

最近お医者さんの中では、処方権というようなことをいろいろ言っていらっしゃいますが、家庭薬の中には歴史も古く、むずかしく処方なぞという前から既に薬を配合した製剤というものがあったような気がします。いわゆる家伝薬というものもその中の一つだと思いますが、こんなことを、いろいろと考えてみたいと思います。大分話が長くなって恐縮ですが、あまりむずかしくない、肩のこらないお話しで進めて行きたいと思います。津村さんよろしくお願いいたします。

津村　堀内さんから今ご紹介いただいた皆さんは、違った分野にありながら漢方薬が好きでしかも信じています。皆、漢方薬に関心を持っている者が集まって家庭薬と漢方というものについて、普段言いたいこと、聞きたいことを話し合ってゆくということはいい企画だと思いますので、ご期待に添うように思いますが、たりない処は堀内さんに補足をお願いしたいと思います。まあ、何から話してよいかわからないのですが、どうでしょうかね、玉置さん。

玉置　今日は堀内さんからご案内をいただいたのですが、その中に漢方薬の座談会とございましたけれど、その漢方の方の字ですが、法律の法の字が書いてあるのです。普通は方角の方の字が書かれておりますが、どういうお考えがあるのか、その点を一つ堀内さんにおうかがいしたいのですが（笑い）。

土田　これは方角の方の字しか絶対に使いませんか。

玉置　ええ、でも大阪のほうでは法律の法の字を使うことがあるようです。ある蝮のメーカーさんが法律の法の字を使っています。無意識にお使いになったのか、あるいは何か別の意味があるのかと考えるのですが、これはただ何となく。

堀内　ええ、何となくです。

玉置　新聞にもよく両方の字を使っているようですが、東京ではだいたい方角の方ですね。

土田　法律の法は俗字ということですか。

土田茂雄氏

玉置　俗字ですね。処方という意味ですからね。やはり処方ということになると方角の方でしょうね。法律の法でも意味が通らないことはないのですが。

堀内　そういう具合に私はどうもあまりくわしくないのですよ(笑い)

玉置　それで出たら面白いお話しがうかがえるのではないかと思いましてね。これはやはり処方の方の字と一応私は考えているのですが、どうですかね。高橋先生、漢方の処方というのは薬草の処方という具合に考えているのでしょうか。

高橋　それは古典に出てくる処方はそうですね。現在では処方も、古方とか後世方とか言って完全に区別されて使われないようですけれども、先生方の系統としては大体別れているのです。先生方によってやはり得意な処方というものがありましてね。傷寒金匱の処方を用いられるとか、あるいは後世の処方を多く用いられるとかいうことです。その処方というのが、古典に載っている処方で、もう決っている分量を各先生方の特徴によって増減されるわけです。患者さんの容体によってそれにさらに加減をされるわけです。ですから、先生もその日その日によって、同じ病気でも加味逍遙散が多く出る日と小柴胡湯がうんと出る日があるわけですね。やはりその日その日の先生の気分でも違うようです。傷寒金匱の原本どおりの処方が出ることはほとんど稀れです。分量的に多かったり、少なかったり、ほかのものを加減したり、そういうところが家庭薬などとちょっと違うわけです。当然医者の領域ですからどうすることもできないのですが、古方とか後世とかいう問題ですね。まあ、日本に漢方がはいって来たのは後世が先なんですけれど、ほとんど同時に古方もはいって来ているわけです。後世というのは唐金元医学以後で、それより以前の医学が古方であるという派と、傷寒金匱だけを守っているのが古方であるという説と二通りあるわけです。それで最初、安土桃山時代には後世派のほうが優勢だったのですが、江戸時代にはいって、江戸幕府が世の中を治めるために儒学を奨励したのです。伊藤仁斎という儒者が古学をやらなければいけないと説いて、それにつれて古方というものが勃興して来た。古方が盛んになって、並河天民　名古屋玄医という人たちが出て来たり、後藤艮山、香川修奄という名医やその弟子で山脇東洋とか吉益東洞という人たちが出て、古方がどんどん盛んになってきた。それが江戸末期になって、こんなことではいけないということで、両方のいいところを取って治療すべきだという折衷派が生まれて来たわけです。そのなかに本間棗軒とか、和田東郭とか有持桂里と云う方々がいます。

高橋国海氏

津村　今、ずっとそれで流れて来ているのですね。

高橋　江戸末期になって、多紀元簡が江戸に医学館というものを置き、幕府の認可を得まして漢方なり一切の書物を取り仕切ったわけです。それで漢方というのは古典を勉強して古典にのっとって治療しなければいけないということで、また新しい派が生まれたわけです。それが考証派です。このころ浅田宗伯先生がいたわけです。ところが、あまりにも古典、古典と突きとめるものですから、古典を突きとめるということは、漢方には病理論というのがあまりないものですから、結局行き詰ってしまった。そして漢方は蘭学におされてしまい、江戸末期から明治になって、結局、家庭薬というか、家伝薬とかの形で民間に残ってきたわけです。明治になって湯本先生が現われて、少しずつ又漢方が親しま

れるようになり、ぼつぼつ上って来て現在に至っているわけです。

津村　最近は診療所の患者が急激に増えて来たようですね。いろいろな人がみえると思いますが、どういう系統の患者さんが多いですか。

高橋　そうですね、年令からいうと中年ですね。若い人、二十代の人というのは割合い少ないのです。とにかく、病気の種類にもよります。腎臓とか喘息とかは年令に関係なく子供さんでもたくさん来ます。胃腸病が一番多いですね。胃腸病ですとやはり中年の人が多いですね。

千葉　あれだけ胃腸薬がたくさん出ていてもやっぱりだめだということですか。

高橋　洋薬で治らない病気がたくさんあるでしょう。そういう人は漢方でないとだめなのですね。年中慢性の下痢をしているかと思うと今度は便秘する。便秘していると思うと下痢が始まるというふうに、そういう人が診療所に来るとピタリと治ります。それに又婦人科系統の人も多いですね。

津村　いつか大塚先生とお話した時、家庭薬として残っているものは、まあいろいろあるけれども、新薬で治りにくい病気の薬というものは、おおむね家庭薬として発達している。それはやはり漢方のよさを証明しているのだということを言われましたが、それが今、あなたの言われたことですね。

高橋　漢方薬というと慢性病でなければ効かないように思う人が多いようです。ところがそうじゃなくて急性病もそれはよく治るのです。ところが漢方では急性病の患者さんが来ないのです。ちょっと頭痛がするとか、おなかが痛いというと、すぐ売薬を買って飲んでしまう。それで医者に行くほど重い人は病院に飛んで行ってしまう。あっちこち回わってどうにもならなくなって、では漢方でもというわけでいらっしゃる。だから慢性病になってしまうのです。いきなりパッと来てくだされば五、六日で治ってしまうものが、あっちこち回わっていらっしゃるから、一カ月も二カ月もかかってしまうのです。ですから漢方薬は長く飲まなければ効かないということになるわけですよ。そういうことはないのですけれどもね。

津村　これは門前の小僧式なんだけれども、僕は大塚先生にうかがったのだが、傷寒論というのは、急病を治す治療指針と云う意味でそういう立派な本があるくらいだから、急病は治るのですと言われた。それは話しとしてはわかるけれど、どうもピンと来なかったのですが、たいがいの人は、いよいよ困るまでは、ちょっと洋薬で行こうというのが多いと云われると良く判りますね。

津村重孝氏

高橋　津村さんのことを申上げるのは恐縮ですが、私が薬草園にいる頃、津村さんが風邪をおひきになって咳が止まらなくて困っていらっしゃった。薬局で売っている薬はほとんど全部と云っていい位飲んだけれども咳が止まらない、高橋さんいい薬はないかと言って来られたことがあったのです。あの時、そんなにいろいろお飲みになっても治らないのでは少陰病になっていらっしゃるんだなと思って、麻黄附子細辛湯を差し上げたのですが、そうしたら一服飲んだらピタリと咳が止ったと言っておられた。そういう具合にピタッと治るのですね。やはり判定がむずかしいから、そこまでいってしまうと医者の領域で、とても薬剤師とか家庭薬ではどうにもならないわけです。

津村　今、高橋さんのお話しで思い出したけれども、僕が漢方の信者になった非常に大きな原因は高橋さんにあったということです（笑い）一回でピタリというのは、その時以外にも随分あるのです。これは今のお医者さんに言うと怒られるけれども私の家のすぐそばに高橋さんが居られるので、やはり何かないかということをよく言ったのです。ことに戦後の混乱期は医薬品がなく、私は身体が弱かったので、高橋さんにはよくお世話になった。

堀内　それでどうですか、漢薬局さんの店頭でも最近は以前と違いますか。

土田　われわれが若い時分に比べると、お客さんの数は相当増えています。昔から漢方薬をお飲みになる方は、大体中年以上の人が多かったのですが、最近は、先程高橋さんのお話にもありましたが、若い人が非常に増えました。婦人の方が多いですね。新聞やいろいろのマスコミで取り上げられて、今漢方薬のブームだとか何とか言われていますが、そ

れほどじゃあないです。東京に漢方薬の小売店が八十軒くらいありまして、私どもの店なども昔からやっている店ですが、店先きで押すな押すなの影響はないわけですから、まあブームという言葉はオーバーではないでしょうか。

津村　大分よく売れていると云う話ですよ。

土田　しかし、いずれにしても確かに漢方薬をお飲みになる方は増えたということです。これは立証されますね。

津村　それに、一部の信者の人は別として、あまり効きはしないのだけれどもという気持ちがどこかにあったが、最近は漢方薬は効くのだというように一般の認識が変わって来つつあると言えると思いますね。

土田　そうですね。漢方薬というのは、今までは一度お医者さんにかかって、あるいは病院に行くなりして一応治療してだめだと、もう自分の病気はこれで治らないのだというあきらめがあったのですね。それが漢方の認識が高まってくるにつれ、漢方薬でも飲んでみようかという考えのもとにおいでになる方が大分あるから、その点違うのじゃないでしょうか。私たちが子供の時分、今から四十年も前の話しですが、これはとても漢方専門ではやっていけませんから、多角経営でいろいろな品物を置いていた時分には、お店に来る人は、おじいさんが使う薬を学校の帰りに買って来てくれということで大学生あたりが、二、三人で店に来るのですが、その人が買っていると連れが、お前何を買っているのだ、今ごろ漢方薬を飲むなんて馬鹿じゃないのかというような会話を耳にしたものですが、最近はそういう時代は過ぎて、非常に認識を深めて来たということはえらい違いです。

津村　小売店などで原料の収集とかいろいろのことが、戦争を境にして随分変わったと思うのですが、その点どうですか。

土田　やはり何といっても漢方薬は種類が多いですからね。いろいろな栽培もあるし、動物性のものもあれば植物性のものもある。最近ではメーカーさんで材料を使うにしても品物に対する知識を深めて吟味するようになったのじゃないでしょうかそういうことを言うと怒られるかもしれませんが、昔のメーカーは薬屋が持って行って納めれば、どの品物を持って行っても半分盲みたいな状態で納まったということだったが、今の仕入れをなさる方はすべてが、そういったものを非常に吟味してお使いになるという傾向がありますが非常に結構なことですね。昔は四、六の方というのがあった。四、六というのは四分が本物がはいっていて六分がまやかし物、あるいは六分が本物で四分がまやかし物がはいっているのがわからない。それがちゃんとブリキの缶にはいっていて、表に四、六号と書いてあるのです。まあ原料が安いというところに魅力があって使われたということで、戦後は四、六の方というのは市場にはほとんど見かけられません。よく昔から生の値段よりも粉末にした値段の方が安いという品物が出回わっていますが、考えてみても、粉末にすれば分量は多いし、工賃はかかるし、それからいけば生の値段よりも粉末のほうが安いということはないはずです。どこかにカラクリがあるわけですよ。ただ使う方が、高いからといって安いものを要求された場合にはそういう手を用いた時代がありました。

津村　そうすると、それは、消費者、あるいは使うメーカーの勉強というか社会的な組織の進歩というものがかなりあるということですね。

土田　そうですね、薬というものは、薬屋が一番よく知っているわけです。医者が半分わかって、使う患者さんは盲なのです。栽培をする人は自分のところで製造するから、原料もわかれば品物の良し悪しもわかる。しかし、それをこしらえて納められる医者は半分はわかるけれども半分はわからない。今度は飲まされる患者になると、これは盲なのですから全然わからない。そういうことが昔から言われています。ですからその意味においても、いい薬を使わなければ効かないということです。

玉置　今はにせ物というのは全然市場にはないのですか。

玉置新治氏

土田　ありませんね。まあ物によってはね。熊の胃というのがあります。けれども今はほとんどないですね。

玉置　そのほかに熊の胃を使った製剤としてはにせ物はないのですか。

土田　現在はほとんどないのじゃないですか。

津村　まあ、考えられることは、にせ物というひどいのがない代わり極上というものも減ってきて、中位のにせ物じゃないが昔からみればあまり良くないのが多いですね。

土田　そうですね。それと同時に業者間においても優良品を少量取扱うという、昔と違って皆さんが吟味するようになりました。昔われわれが扱った時分には、中国と貿易する場合に、品物はどうでもよいから値段が安いものがいいということで、結局日本に持って行くものは中国のくずでいいんだということで取引きされたらしいのですが、今はメーカーさんがいろいろと原料を使うにも試験をしたり、吟味していますから、納入する場合にもいい品物でないと納まらない。いきおい、業者でも悪い品物は買わないようになった。昔はそういっちゃ悪いけれども、さっきもお話したように、メーカーもそれほど気にとめない、ただ形をしている品物だったらそれで通ったのじゃないですか。

玉置　国産品と輸入物とでは、昔と今とでどうでしょうか。

土田　国産品は量的に非常に減っています。茯苓などの例を取ってみましても、昔は相当使われていましたけれども輸入しないでも国産で間に合ったものが、最近はほとんど北鮮あたりから輸入しないと間に合わないという状況ですね。

津村　北鮮にはありますかね。

土田　それと同時に工賃ですね。たとえば、生薬を採集するにしてもザルをかついでそこいらを歩き廻わってザル一ぱい採ってくれば、それでどうにかなった時代もあったのですが、最近は鉄道線路の工事とか、道路工事というものに若い人が働きに行って、工賃が高いから薬取りなどで一日ごそごそ歩き廻わって五百円とか六百円では、そりゃあ取り手はありませんよ。それに工事人夫などは車を持って迎えに来てくれて、仕事場まで送り、また帰りは工事場まで迎えに来て、家のそばまで送ってくれるということですからね。

津村　それから、条件としては昔よりも山奥に行かなければ採りにくくなったということですね。

土田　それと同時に資源そのものが少くなったということですね。

高橋　少くなりましたね。

土田　豊富にあって大量に採れる場合だったら、そう値段も変わらないのですけれども、産出が少いから値段も上るという状態で、まあ、ゲンノショウコの場合では、今越後あたりの中学生が夏休みを利用して、生徒全体が堀ったものを校庭に集めて、それを業者に渡し、その金で運動具を買うとか、楽器を買うとかしている。まあ、そういう生徒の一団的な協力の下でやるのですからいいわけですが、個々のひとりひとりがやった場合にはソロバンが取れないわけです。

津村　この前新聞に、ドイツの話だったけれども、スズランを小学生が採って来て、それで自分たちの施設の金にするのだということでスズランを摘んでいる写真が載っていてちょっと面白いと思って見ていたのですが、日本ではそういうのがないのかと思っていたら、ゲンノショウコがあるということで、面白いですね。

土田　この前私が書いたことがあるのですが、ちょうど秋の十月末ですが、センブリの出る時期でしたけれど、ある峠を越えて行きますと、センブリが相当生えていて、峠越えはわずか四キロぐらいの道のりでしたが、歩いているうちに、たちまち両手につかめないほどセンブリの採集ができました。これは随分センブリがあるということで、その土地の人たちに採ってもらおうという商売気を出しました。ちょうどサツマイモの出る時だったので、農家に頼んでふかしてもらって、一緒に行った若い者たちに食べさせたりしたものですから、夜遊びに行って、随分この近所にセンブリがあるのだが、採って貰えませんかということで、話を持ち込みました。いったい、いくらくらいの相場なんですかということで、その時分センブリが高値を呼んでいる時で、前年に比べると倍くらいの値がしていたので、大体この位なら採ってくれるだろうということで頼んで来ました。いつまで待っても送って来ないので、子供たちに小遣いを渡して、まあいくらか歓心を買おうとしてやったのですが、結局時季が過ぎて冬になっても送って来ない。どこに原因があったかと想像したのですが、要するに人手の問題ですね。畑で働いている土地では大半の人が女連中ですから、学校に行っている子供たちは、もう五年か六年生になると、帰るのを遅しとばかり待つていて、皆畑などに動員されてしまうのですね。だから子供たちも夏休みでもそういった余分なこ

とができないのです。やはり人的資源が乏しいため、せっかくそういう薬草資源があっても採れないということなのですね。

津村　そういうことがひとつの原因かも知れませんね。

玉置　高橋先生、そういう天然資源が採れないということになりますと、栽培はどうなのでしょうか。

高橋　栽培しているものは極く僅かなのです。例えば柴胡。

土田　柴胡は、現在は一部的にやっています。当帰、川芎は北海道で、これは代表的ですね。

堀内　千葉さんが漢方に興味をもったのはいつごろからですか。

千葉　ぼくが漢方に興味をもったのは二、三年前の話です。ある友達から漢方を研究してみなさいということで、それが動機で原料を集めて

千葉亂頼氏

どんなに効くかという自信を持たなければいけないから、皆さんにためしてみたのです。傷寒金匱に則って処方を試みました。たまたま、私の子供が幼稚園から小学校、いま小学校三年ですが、二年間も鼻の病院に通って、このままにしておくと蓄膿症になると言われました。鼻の医者に通っていて蓄膿症になる、蓄膿症になると言いながら鼻たれが治らない。何とか漢方であるんじゃないかと、その時は漢方を多少かじっていたので、いろいろ考えて漢方薬を続けて飲ましたら、それがピタリと止まってしまった。今までこんなに鼻紙を持たして通わしていたのに、玉置さんもご存知ですが、こちらの車で薬草採集なんかに行きましても、玉置さんの鼻紙を取りあげ、都の課長さんの鼻紙をもらって使ってしまい、最後には木の葉でかまなければならない、そのくらい鼻が悪くて風邪をひきやすい子だったのです。それが二週間くらいでピタリと止ったので、これは漢方でいけるのじゃないかということで真剣になって、それからいろいろと試験的なもの皆さんに差上げて、随分漢方では自信を得ました。これから大いに勉強して盛大にしていきたいと思っていますが、それもまだ二、三年のことですから、とてもここでお話しするようなものではないのです。ただ漢方信者になったという程度のことです。

津村　原料か何かで特にお困りの事はありませんか。

千葉　うちでは、実母散の原料で一番困るのは川骨ですね。直接新潟県に買いに行くのですが、年々掘る人、採る人がいなくなるのです。今年も、工場長が向うに行って来たのですが、こっちの請求した半分しか送って来ない。沼がだんだん埋めたてられて、そういう面から圧迫されてくる。これに問題があります。

高橋　薬草園のあった仙川ではかわほねが川に花を咲かせていて、とてもきれいでした。それが全部埋めたてられて、川がなくなってしまって見られなくなりました。

津村　川骨なんか花がきれいだしそれこそ玉置さんあたりは、なかなか捨てがたい薬草じゃないですか。

千葉　川骨はだんだんなくなって、しまいには全然採れなくなってしまうのじゃないですか。

津村　薬草が文学的にもいろいろ取扱われているということは昔から民間に親しまれていたということですね。ただ、日本人は非常に頭はいいが、あきっぽいのですね。外のものに直ぐ飛びつく代わりに、いいものでもあきて捨ててしまうという傾向があるような気がして、残念だと思うのです。私は、ヨーロッパ等を見て思うのですが、向うでは依然として漢方薬ではありませんが、昔からの漢方薬的なものが、非常に使われています。医者も今でも生薬を使っている。我々の小さい時には医者から杏仁水をもらったものですがどうも日本人はあきっぽいという感じがします。しかし、そのために進歩的といえば進歩的でしょうし、したがって、今のような経済の発展というものがあるのかも知れませんが何か味噌も糞もいっしょにして、捨ててしまって、取り返しがつかないことになりはしないかと心配です。その点で、われわれはいいものを残して行くような側に回ってゆきたいですね。どうですか、ここは文学的な問題ですし玉置さんの独壇場と思いますが（笑い）

玉置　文学的といっても、私も詳しいことは知らないのですが、手近の歳時記をとってみましても、一月のところの初めにおけら詣りというのがあります。京都の祇園八坂神社でおけらを燃やしてその煙で餅を焼くと不老長寿になるという習しがあったのですが、上野のごじょう天神でもおけら餅というのがありますか

ら、案外、そういうふうなものが、民間に習慣として残っているのじゃないかと思います。五月五日は薬の日といいますが、本来は山に行って鹿の砂袋を取ったのですけれども、それがいつの間にか薬をとる日になったのですね。そういう行事が、現在ではすっかり廃れてしまって、薬の日といっても、五月五日はまあ菖蒲湯はありますがね。菖蒲湯も多少薬に関係がありますが、そんなことでだんだん減って来たと言えると思います。それで、漢方薬として歳時記に載っているのはこうしゅう散というのが七月の季題にあります。これは暑さあたりとか食あたりに使う薬ですがそれなら冬の風邪の薬として葛根湯などというのがありそうなものですがそれがないのです。風邪薬としてはありますけれども、たとえば、かぜ薬色濃くいでて頼のもしき、確かにこの漢方薬は色がありますから、濃い方がいかにも効きそうな気がします。事実効くわけですね。私は歳時記の中に葛根湯というのを冬の季題に入れたらと考えます。川柳となるとこれはかなり出てきますね。最近薬事日報あたり薬と川柳ということでいろいろ取り上げているようです。

特に最近目立ったのは、有吉佐和子の華岡青洲の妻ですが、これは大変有名な話ですが、ああいう小説にもう少し漢方薬を取上げたものがないかと思うのですが、私は寡聞でよくわかりません。

津村　あれはテレビで見たのですが、何か薬を使ってみて死んでしまうとか、死にそうになるというようなことが中心でしたね。

堀内　麻酔薬のことでしょう。川柳には強精薬なんか出て来ますね。句は思い出せないけれども。

堀　内　伊太郎　氏

玉置　私もはっきりしたことは憶えておりませんが、　八味丸飲んでるそばのいい女房　確かそんなようなのがあったと思います。多少ふざけた、洒落たものがあると思うのですが、今手許にはありません。安川さんがかなり研究していらっしゃるようですから、私もそのうちに教えていただきたいと思っています。

津村　そういうように、民衆の中に残っていたのが、明治の日本の混乱だとか、洋方でなければだめだというような、いろいろな悪条件が重なって隆盛を欠いた。むしろ衰退になっているということは言えますね。

土田　結局、蘭学がはいり、ヨーロッパから珍らしいものがはいって今ではわれわれが何とも思わないガラスの器物がはいってくると、それまで陶器しかなかった日本では、ガラスの入物にはいって、薬ビンも目盛りがついていて、ここまで飲めばいいということで、見えているということは非常に珍らしかったのじゃないですか。

津村　例えば日本では陶器はりっぱなものができているにもかかわらず、陶器などどうでもいいように思って、向うものを尊重したということもあるんですね。最近また日本でなければ陶器はだめなのだということで陶器の元祖であり中心であるといっていますが、段々そういうように日本のものを見直し始めたといいますか。一つは日本は他の国と離れていて世界との競争が無かったのですが、ジェット機など交通機関が発達して、外国と一しょになってみると日本の良さがわかるのでしょう。

私がヨーロッパに行ったのは八年前ですが、アウトバーンのすばらしいのを見てびっくりしたものです。最近娘がヨーロッパに行くことになったので、アウトバーンはすばらしいからぜひ行って見てこいと言ったのですが、帰って来て、あんなものは一つも感心しない。日本の道の方がよっぽどいいというのです。多分私の行った時は、日本の道が悪かったからよく見えたのだろうと言うのですね。なるほど、八年間で日本もそれだけ進んだのかなということで感心しましたが、たくさんの人がヨーロッパその他を見る機会を得て、なるほど向うにも向うの良さがあるが、日本にはまた日本の良さがあるということを、今日本をみつめ始めているという時期じゃないですかね。そういういろいろな条件が重なって、また漢方薬が見直される時になって来たのだと思います。

土田　やはり東洋民族というのは漢方薬というものが身体に合っているというか、自然なものですから、病気に対しては全部が全部いいとは言えませんけれども、洋医学のいいところと、漢方医学のいいところを取り合って、いい薬を作っていくということは必要だと思います。

それにお医者さんの薬で水薬というのは、近頃はあまり出しませんが、昔は少しよくなると一ぺんの二回分が飲みきれなくて捨てる人が随分いました。ところが漢方薬だと身体がよくなっても飲まないと何か頼りない感じで、連服して、全快に近い、あるいは全快した人が頼りにする傾向があります。それだけにその薬が最初飲む時はまずくても、飲み慣れるというか、飲むとあきないという傾向がありますね。

高橋　ありますね癖になるわけじゃないんだけれども。

津村　体が要求するのじゃないですかね。これは昔、精神科のお医者さんに聞いたのですが、カミツレがはいった薬を調合してやったら、患者は自分の症状がちょっと重くなってくるとこの前の薬が欲しいと言うのです。これは津村さん面白いですよと言っていましたが、あれは精神安定薬ということなんですかね。非常にその薬を好むそうです。いま土田さんがおっしゃったように身体が欲するような感じがあるように思います。

玉置　確かに漢方薬というのは飲んでおいしいですね。私の飲み方はこれは高橋先生に叱られるかもしれませんが、しょうがを甘酢に漬けまして、いわゆるおすし屋さんで出すガリですね。それをボリボリやりながら漢方薬を飲むのです。おいしいですね。漢方薬は食前に飲むことが多いから、おなかが減っていて大変おいしいんですね。また食物と同じようにおでん的効果があるのですね。コンニャクだけ煮てもおいしくないけれども、それにコブとかハンペン、ちくわ、大根、ガンモなどいっしょに煮るとおいしくなりますね。それと同じような効果ですね。そういう意味で大変おいしいのです。おいしいということは効くことと繋がってくると思うのです。

セネガ

高橋　一応　身体と合っていると おいしいと感じるのですが、合っていないとまずくて飲めませんね。そういうことははっきり言えるのじゃないですか。患者さんがまずくて飲めないと言った場合は、たいがい具合がよくないですね。

千葉　その時には別の処方を構じなければいけないということですか。

高橋　おいしくて二日分を一日で飲んでしまいましたと言う人は、よく効いて早く治るのです。それで不思議なもので、もう良くなったから先生がいいと言ってやめるでしょ、やめた後非常に元気になるのです。それでその次にまた診療所に参ります。また起きたのですかと聞きますと、いや、きょうはほかの病気が来ました。あれからすっかり元気になったと言われるのです。ですから、飲んでいる時よりもやめた後、大変身体の調子がよくなると皆さんおっしゃる。身体をよく整えるのですかね。

津村　そう、体調を整えるという効果があるのですね。いつだったか石原先生が、食事の話だったけれども、何か漢方薬的なものを主体にした食事が中国料理にある。その料理人が横浜にいると言っておられました。

玉置　いま高島屋の出口のところに漢方薬的な食事のあれが出ていました。帰りにご覧になると面白いですよ。

津村　石原先生は、準備があるので今すぐじゃ困るけれども、前もって言ってくれれば、連れて行ってあげますよと言っておられました。

高橋　南京町の何というか覚えていないけれども、石原先生がいつもいらっしゃるところがあるのです。

津村　何か、そこがそういう食事を食べさせるのですね。普通の中国料理と違う、そういう料理を作るから何だったら一度食べに行きませんかと言われたけれども、その何だったらという気にならないんで(笑い)行きそびれています。

土田　身体の具合で食べたらどうなんですか。肩がこるからといった時や疲れやすい時にその料理を食べるというふうに。味はどうなんですか。

津村　もちろんおいしいのでしょうね。たぶん効くといっても、強精強壮とかそんなものじゃないと思います。

堀内　ですから必要ないんじゃないですか。それで行く気にならない(笑い)。

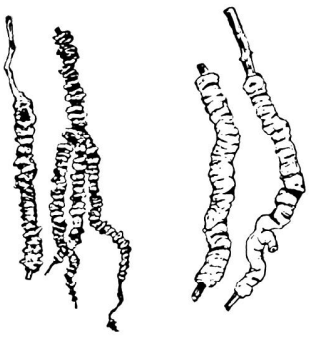
玉置　理屈から云うと家庭薬と漢方薬とは直ぐには結びつきはないですね。漢方薬は実施によって処方が違うわけでしょう。家庭薬を薬にする場合には最大公約数ということも

考えなくてはならないし、これはなかなかむずかしい問題じゃないかと思うのですが、どうなんでしょうか。

高橋　要するに古方の処方ですね傷寒金匱の処方というのは、病種が判然と区別されているわけです。それを家庭薬にもってきますと使える人と使えない人が出てくるわけですね。だから家庭で使うには一般的じゃないとしている。一般に家庭薬として使えるというと、やはり現代医学のように内科とか外科とか耳鼻科というように分けて、それに対する処方、その病気を治療するのに使う処方を書いてある本から拾ったほうが家庭薬向きになると思います。そうするとやはり折衷派あるいは後生派の処方になってしまう。傷寒論から出てくる処方は効くことは効きますけれども、医者の領域じゃないかと思うのです。そうするとやはり浅田宗伯先生や有持桂里先生、本間棗軒先生方の本から拾ったほうが無難ではないでしょうか。現代医学と違わないように、病名で判然と区別して書いてあるわけですから、その中から適当なものを拾って、取捨選択してゆくと、飲んだから悪くなったという人はあまり起きないのじゃないですか。やはり漢方薬でも続けて飲むと胃にさわるものもあります。ですから一概に漢方薬だから飲んでも決して害にならない、さわらないとは言えないわけです。

津村　風邪にきく葛根湯も二日分を一日で飲んだら危ないですよと高橋さんに注意された事があります。もちろん薬だからそんなむちゃな飲み方をしたら危険なものもあるわけですね。

高橋　葛根湯をあまり多く飲みますと夜眠れなくなりますね。だから風邪は治ったが、よく眠れないという症状が虚証の人の場合起きてくるわけです。そういうひらきが起きてくるのですね。傷寒論の処方は。



土田　家庭薬の起源というのはどういうもとで始まったのでしょうかね。医者に行って診察してもらって医者から与えられた薬はまあ間違いないけれども、そのほかに家庭薬というものが現在こうして一般大衆に用いられて効果も相当にあがっているという根拠というか、起源はどこにあったものか。

津村　われわれのほうから言えば家伝薬ですね。この家伝薬がなぜ起こったかと言えば、誰でもかれでもそしてどんな病気でもすべて医者にかかると、医者の人手の関係からいっても、また費用の関係からいっても、非常に困難だということがまず第一の原因だったと思います。したがって、初めは民間薬的なものを用いてきた。そのうち、医者の学問をした人、あるいは医者と親しい人たちがこれを一つの処方したものを使う様になった。そのようなことが起源ではないかと思うのです。うちの場合は親父の母の里というのが代々医者で、家伝薬があったのです。私どもの親父が子供のころは医者はやってなくて家伝薬をほしいと云う人にあげていた様です。もらった人はお礼にいろいろなものを持って来るという。ほんとにいい時代の人情的な方法でやっていたらしいのです。あまりお礼を持ってくる人が多いので、父はこれは効く薬だから、これを売ったらよかろうと云うので売り出したということです。いまの家庭薬の前身が家伝薬であり、それが明治を境として家庭薬的なものになったのが最初の発生じゃないかと思うのです。堀内さんのところのものは、そうではなく作られたというのですが、何か。

堀内　そうですね。私どものものは、浅田宗伯先生の持っておられた処方だから、ちょっと、家伝薬的なものとは違うでしょうね。

津村　でも、家伝薬にそういうものがたくさんあるから、それと同じような意味じゃないんですか。それを一つ売り出したらどうかと言われて浅田さんの処方をいただいてお売りになったのでしょう。

堀内　そうですね。

土田　最近はあまり使う方がないけれども、昔は年輩の人というと皆知っていた、越中富山のアンポンタンと、とにかく歌にもあるように、あの話を聞きますと、やっぱり城主がそれを作らせて、一般の住民に飲ませたり、国をあげて製造して皆に売らせたとか、だから今のような商業という面にとらわれず、人助けの意味で配ったり、治したりしたということが多いのじゃないですかね。

玉置　もう一つは明治九年に医師

制度が改正されて、漢方医というのが壊滅してしまった。そしてそれまでの漢方医の処方というのが漢方薬として残り、それを保護育成して守ったということもあるのじゃないでしょうか。

津村　そういうことはあると思いますね。病気の治療は医者以外がやってはいけないということを理論的に言いますけれども、それは一つの理屈であって、それでは医者が全部の国民の病気を一手に引受けて完全に治療することができるかと云うに、そのためには医者が国民何人につき一人いたらいいのかということを真剣に計算している人がいますが、その人の結論としては医者だけにたくさんの人が取られたら、ほかの部門に優秀な人がいなくなって、日本の経済そのものが繁栄しなくなるくらいの数がいるのじゃないかとの事でした。国民の健康を経済的に、そして合理的にやってゆくためには家庭薬が大きな役目を果たしていると思います。これが漢方薬と繋がって今言った家伝薬とか玉置さんの言われた漢方医の処方が残っているとかという成り立ちがあるために、家庭薬が非常に強いと言えるのじゃないかと思うのです。

堀内　大分時間もたちましたが、大変面白い、興味のある、しかも勉強になるようなお話をしていただきまして有難うございました。漢方薬というものが源になって家庭薬になりまた一方は、家伝薬、民間薬というものが源になって、これが合わさって一つになり、これに近代の薬理が加味されて、現在の家庭薬というものになって来たのじゃないかと思います。さっきも言われたようにお医者さんだけが病気を治すのではなく、われわれ医薬品メーカーもいっしょになって健康を守り、病気をなくし、生命を延ばすということでやるのであって、最近は医者と薬屋の仲が非常に悪いような、対立的状態みたいなものがあるといわれていますが、そういうことはないと思いますけれども、今日のお話はそういう点で非常に有益だったと思います。

さっき土田さんもおっしゃったように、われわれメーカーもいいものを出して一般からいろいろの批判を受けないように、そしてますます社会のためになるということを考えてゆきたいと思います。どうもお忙しいところを有難うございました。

藤井老を偲ぶ

田中敏明

藤井さんが逝去された。先号でよき先輩としての往時を書いたばかりなのに、再びお目にかかる機会を失った。毎年売工時代（東京売薬工業組合）関係の方々を御招き下さるが、私はいつも伺えずに失礼したのが、今となって悔まれる。十年程前牛込で御新築になり、一度遊びに来なさいと御親切におっしゃって下さったままチャンスを逸したのも残念でならない。時折歌舞伎座で奥様と御一緒のところをお見かけしたのも思い出となった。

終戦時、大局的によく考えて、組合の処理を立派になさった。御店の一隅に組合を引取って下さる。組合の仕事がポツポツ軌道に乗り出すと、玉置さんの一階の机一つ頂いて、塚越君が事務を受取った。其の内二階の一室に移って村川君も加わり、玉置弘三君が理事長となった。昭和二十年秋、藤井さんが新川町のビルを御世話下さった。それが土地八十坪、建物百二十坪で二十五万円という値段は、今から見ると夢の様であり、やっと自主独立出来たわけである。以後東京都家庭薬協同組合で二十年間使用し、現在の新橋の組合ビルに移転した。又全国家庭薬協会の仕事の一端として、昭和二十二年下北沢に土地三百坪、建物百坪の大邸宅を二十五万円で御世話下さって、全国の大会や会員の宿泊に当てて下さった。此の様に御配慮いただいた事が、すべて薬業会発展の礎となった。御自身では表面に立たずに、適当な助言をいただきすべてが都合よく進んだ。藤井さんの私達に及ぼされた影響は大きい。全国から東京の家庭薬組合はまとまっていると云われるのは、故藤井老の力に依ることが多い。今、正に、巨星落つと云った虚脱感に包まれて、青山斉場より帰っ

様て来た。藤井さんどうぞ私達を何時迄も見守っていて下さい。一生懸命藤井さんの御心を継ぐに致します。数々の多大な御指導を、此の稿をかりて厚く御礼申し上げます。

（東京甲子社々長）

藤井さんを偲ぶ

懐しいまま藤井さんと呼ばさせて戴きます

矢田部　誠

私は慈父のように慕い尊敬している藤井さんの訃を、一月十一日、成田不動の初詣をして帰り、東京新聞の夕刊で知り、巨星地に墜つの感傷に咽んだ。昨秋新橋演舞場にご案内を戴き、百歳の天寿を信じて、お別れしたのがとうとう最後となった。痛惜の極みである。

昭和十四年の暮、石橋千円先生のご紹介でお目にかかったのが最初で翌十五年一月に東京売薬工業組合が創立されると同時に、藤井さんが理事長に就任され、私を書記長に任命されたのが、組合が発展的解散となり、清算が終るまで、五年間親しく薫陶を受け、その後も並々ならぬご厚誼を戴いている。

組合が創立された当時は、世相が段々けわしくなり、遂に大東亜戦に没入した。従って物資も少くなり、戦争優先で平和産業の原料資材は極端に制約され、業者の方々は非常に困られた時代である。

その時点で原料資材の統制配給の衝に当られたのだから大変である。藤井さんはご承知の通り自己を律すること頗る謹厳で、正義感に強い人であったが、その半面博識で話術に長け、人を納得せしむる長者の風格があり、本舗の旦那方と新進気鋭の新興業者との間にあって、よくこれを調和されたその努力、誠意、識見は大したもので、特に利害関係の深い原材料の配給割当や、売薬企業整備の断行など、藤井さんが衝に当られたればこそ、曲りなりにでも遂行できたのだと思っている。

藤井さんは誰よりも薬業を愛し、企業整備は已むなくされたが、企業の根を温存することには、将来に備えて最善を尽された。

組合が解散されるに当っては、見本に集めた薬品まで競売して、出資者には配当金を添えて、完全清算を決行された。当時雨後の筍のように統制組合ができたが、恐らく多くの組合は赤字のまま雲散霧消したであろう。

この有終の美をなし遂げられたのは、藤井さんの真髄とも云うべき正義感の現われで、往時を追懐して感慨無量である。

逸話も数々あるけれども、与えられた紙数は既に超えている。遺憾ながら擱筆する。

（昭和四四・二・五稿）
（元東京売薬工業組合書記長）

思い出すままに

白井正助

本舗会と薬友会は殆んど藤井翁が中心で創立されたように考えられます。然も何時も翁は隠れて若い者に手柄をさせられたものです。

本舗会創立後レーベン本舗中南定太郎君が小松痔の薬本舗小松喜一郎君と不肖白井を本舗会に加入させて貰いたいと、中南君が当時の本舗会員（全員廿名程）間に加入承認の署名捺印を得て申込まれました。翁は是が前例になると困るから今回は承認するも将来は何とかしなければならぬと、其の後加入者は会員の過半数の賛成に限るとして其の方法を白黒の碁石で賛否を表示碁笥に入れて更定しました。

本舗会は会長を置かず当番幹事二名制として発足されて参りましたが、戦争の為代表者の要が出来て、会長に浅田飴本舗先代堀内伊太郎君、副として不肖私が選ばれました。此の案は翁でした。戦争熾烈となって遂に本舗会も解散の止むなきに至りました。

戦後東京甲子社々長田中敏明君にお伴して翁の許に薬友会創設につき色々とご注告を頂き、薬友会は本舗会のないあとはこれに代るものと思われるから、責任者をきめず当番幹事制で行くようとのお話でその通り発足したのです。

（元エスエス製薬社長）

薬と共に四十有余年（その七）

松田金之助

今日では緑と水に恵れた美しい町青梅市ですが未だに私の心に浮ぶ青

梅町は鄙びた静かな町です。此の青梅の町も後輩に譲り主人の命で中央線へと進出いたしました。

先ず八王子を振り出しに上野原、猿橋、大月、谷村、塩山、石和、甲府へとセールスの足も伸びてまいりました。

その当時の八王子からは現在の八王子市を予測出来たでしょうか、表通りは和風の商店が軒を連ね奥深く土蔵があり表面より内側に重点を置く伝統を誇る町でした。

殊に機織の町として全国有数の生産都市でもありました。その故に、人の交流も激しく自然土地の人柄も駆引の強い町である事を再三先輩より聞かされて居りましただけに少々怖れ半分は興味深々という状態で第一歩を踏み出しました。駅前にでんと構えられた栗原薬局を始め平山、森久保、滝沢、津田、下島、鈴木栄春堂、江原、鈴木至誠堂等凡そ十五六軒ありました。

平山元会長

案ずるより誠意を以って当たれば と心に誓いも無駄でなく何時か松田松田、と引立てて下さるのでした。当時八王子薬業界に於いて活躍された平山御主人、森久保御主人共に手を携さえ、業界をリードされたものでありました。

平山様は第一陣を離れ悠々自適され森久保様は既になく御子息が現在の薬業界のトップに立たれて居られます。

故 森久保元会長

後年独立後八王子は青梅に次いで特に親しい町となりました。朝早く店を出て夜十時過ぎ帰店、之が八王子を廻る時の日程でその翌日は必ず中央線へ発つのも日程の一つでありました。翌朝四時起床両国から須田町へと星を戴きながら人影も無い電車道を万世橋へと急ぐ私も冬の最中は少々辛い事でした。飯田橋で乗換え五時十分発の長野行に乗り込み七時二十分上野原駅着駅の改札も逃げる様に駅の真正面の崖をよじ登るのでした。

御承知の様に上野原の町は駅の真上の町で道路沿いに歩けば何倍も時間がかかります。

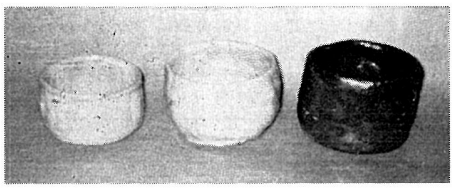
若さも手伝い直線コースで一気に崖を駆け足で登り山川、原田、安藤白子屋各薬局を駆足で廻り辷る様に次の汽車に飛び乗り猿橋で下車唯一軒の大野薬局に立寄り徒歩で大月へと歩き出すのでした。この間三十分現在ならばバスも電車もハイヤーもありますが一時間毎に出る唯一の馬車も待って居れない私は一生懸命歩き出すのでした。今日は大月泊り予定のコース通り大月の町に入ると何となく活気に満ち溢れ人の往来も盛んな所でした。甲斐絹の機織場として栄えた此の町は薬品を扱うより染料の方が主でありました。

小俣、古沢、原田各薬局を廻り宿に着くとその日の整理を終え宿の床の中で明日の予定地谷村、塩山、石和、甲府までのあれこれ考える中に何時か眠りに就くのでした。

津村重孝氏・山崎栄二氏夫人作品展

二月はじめ、三越で二つの展観が催された。一つは第一回陶芸クラブで、もう一つは至巧会である。

陶芸は松永安左衛門老を中心とする実業家の余技である。余技なればこそ、専門家には達し得ない清新の作が多かった。中にも、津村重孝氏の出品された皿は気品の高い秀作であり、衆目を集めていた。



盃茶 作氏孝重村津

至巧会は山崎栄二氏夫人晴与様のグループ人形展で、毎年三越で開かれている。今回も二点の力作を出陳されたが、指一本にも胡粉を五十回も塗り上げるという、精魂こめた製作ぶりで、初心を失わない正直さに造型を超えた美しさがある。

精選した古代裂の衣裳とともに会場にひと際光彩を放っていた。

（玉）

山崎晴与氏作人形

近代工場めぐり（2）

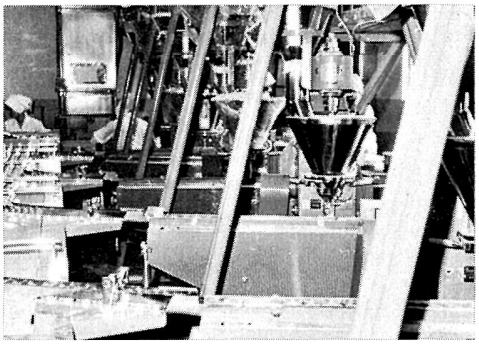
（株）龍角散

東神田の本社（左）　工場（右）

数年前迄はこの二百坪近い土地の上には、終戦後急造されたバラックが周囲のビルブームの中で申訳けなさそうにひっそりと建っていた。その中では、全くの手仕事で竜角散の包装が行なわれていた。勿論冷房どころか、真夏のうだる様な暑さの中でも仕事は秋の一斉出荷をめざし、一刻の休みもなく続けられていた。中庭を隔てた裏の工場では数十年以前と変りなく、一日中時代もののボールミルがごろんごろんと物憂い音を立て続けていた。工場の隣りでは、関東大震災と空襲の二度の大火にヤキを入れられた本社の建物が、古いが侵し難いガンコさで、豊島町の角にまるで家庭薬業界のシンボルのようにすわりこんでいた。

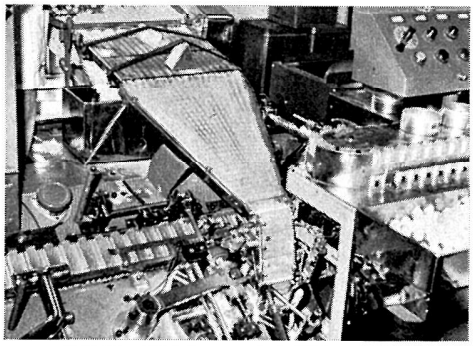
時代は移り昭和三十八年の経営革新がこの眠れる戦艦〝三笠〟のカマに火をつけた。老朽戦艦はキシむ体をもちあげ、いきなり三十ノットの高速で走り出したのである。当然製造工程の合理化、能率化の声があがった。意欲は全社にみなぎり、毎日が真剣な議論と研究に明け暮れた。曰く、新工場は津田沼の用地に余裕をみて建てるべきである。地価の高い所ではもったいない。いや違う、小人数で能率的にやろうと思えば矢張本社のそばがよい。第一資材原料の搬入、製品の出荷に絶対有利である　そして二年、遂に断が下された「人員配置その他の条件から場所は本社隣接地とする。ただし高額の地価を上廻る生産性を附与すること、人員増加を見込まぬ事を条件とする」内藤専務、渡辺製造部長、上条総務部次長を中心に直ちにチームが作られた。全員殆どが三十そこそこの若手技術屋チームは、それこそ不眠不休の努力を行ない、約一年後、基本計画が示された。

その計画をみたものはみんな唖然となった。これが果して工場といえるだろうか。こんなに安く出来るものだろうか。延四百五十坪の四階建



自動充填器……薬剤の補給、容器の補給もすべて自動化されている

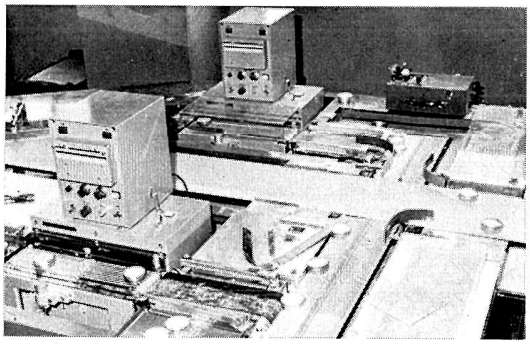
新工場といったってどうもピンとこない。それ程にこの基本計画は高密度であり、細かく計算され、一切のムダを省き、生産性一本に絞り込んだ案であったのである。それは工場が出来上った後で現実に証明された。各階の有機的繋がりと現場技術者の斬新な発想は、若く有能な設計者平井栄一氏の夢と結び付いて、従来の製造工場の概念を完全に打破る作品を生みだしたのである。工場は大きいばかりが能じゃないし、又企業を誇示するアクセサリーでもない。工場には、製品を造り出す為に最も適した機械と労働環境が要求され、ここで始めて責任ある良い製品が造り出されるものである。従って



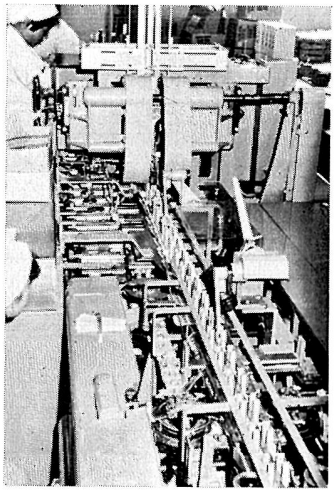
自社製の高速トローチ充填器……人間40人分の能率をもつ

当社の機械は長年竜角散を量産するのに最も良い方法を探し続けてきた。当社の研究陣により一つ一つ設計、試作され、完成したものである。扱い難い生薬を微粉末にし混合する機械、分注する機械、速溶解性顆粒製造機、いずれをとっても生薬の特性を生かした技術を機械化したものである。そして全工程を通じ、常に一定の温度と湿度を保つようにし、空気調整には殊の外注意をしてある。たまたま良い労働環境がこの条件に一致し、快適な作業環境となっている。床、天井、作業台の高さ、配色、採光、音、すべて衛生学的、人間工学的に検討して決められた。機械の騒音にも出来るだけ消音設計を取入れた。就業時間中は全工場にバックグラウンド・ミュージックを流し、作業能率の向上と精神的疲労感の除去につとめている。包装工場は限られた床面積を有効に利用し、ベルトラインにバイパスを設け、途中随所で機械に取入れながら流す様にしているので、作業転換も無駄なく行なえる。従って生産量の割に従業員の数は少なく、一人当りの生産性は本工場の完成と共に著しく向上した。

現在は本社工場において、竜角散、クララ、竜角散トローチを製造しているが、需要量が高まったので船橋工場内に更にクララ、竜角散トローチの専門工場を建設中である。



自動秤量装置……毎分100～120個の製品の重量チェックを高精度で自動的に行っている



自動包装器の一部

委員会から

厚生委員会

当委員会も今般新たに秋山義郎氏を加え、去る一月十日本年初の会合を行ない左記事項につき討議致しました。

(1)年会費徴収の件
(2)TKGC優勝大会開催の件
(3)碁会優勝大会開催の件
(4)組合春季懇親会開催企画の件
(5)弘報委員会提出原稿の件

以上にて、本年も引続き事業推進に鋭意努力致します故、皆様にも何卒御協力を御願い致す次第です。

扨昨秋北陸で催しました懇親会は遠路多数御参加により頗る盛況裡に終り、特に懇親カメラコンクール（前号掲載）に於いては、各人熱心に腕を競い更に楽しく会を盛上げました。

其の後のゴルフ、碁会の成績を御報告致します。

1　TKGCゴルフ会

第8回　43年9月24日
於相武カントリークラブ
優勝　山崎　寅　1等　山下準一
2等　滝沢英夫　3等　堀　俊子
BB　中村源三

第9回　43年11月5日
於天城高原ゴルフコース
優勝　堀　正己　1等　河合保彦
2等　小原勝郎　3等　山内敏生
4等　秋山恵俊　5等　歌橋一典
BB　山崎　寅

第10回　44年1月29日
於武蔵カントリークラブ
豊岡コース
優勝　中尾義隆　1等　秋山義郎
2等　地葉一郎　3等　飯島明正
4等　中村源三　5等　秋山恵俊
BB　山崎栄二

2　東京家庭薬碁会

第6回　43年11月16日
於日本棋院中央会館
優勝　市川一雄　2段　4戦4勝
1等　中島禎夫　3級　3勝1敗
2等　大竹　豊　6級　3勝1敗
3等　飯島明正　初段　3勝1敗
（町田）

事務局だより

◇十一月十八日午後五時より東京薬業健康保険組合会議室に於て衆議院議員亀山孝一先生と参議院議員迫水久常先生を囲む薬事懇談会を開催して、当面する大衆薬の問題に関し会員二十名が極めて有意義な懇談を交え午後八時盛会裡に散会した。

◇十一月二十一日午後三時より東京薬業健康保険組合会議室に於いて都庁側薬務部、課長、係長四名と会員四十六名による薬品座談会を開催した。

(1)中小企業対策の件
(2)医薬品製造承認の件
(3)医薬品の広告の件

につき活発な意見の交換を行い午後八時盛会裡に散会した。

◇十二月四日午後二時よりパレスホテルに於いて、東京医薬品工業協会、東京医薬品卸協同組合、東京薬貿協会、東京都家庭薬工業協同組合四団体共催による昭和四十三年度受彰者祝賀会に組合関係受彰者六名、会員三十九名が出席盛会であった。

◇十二月十三日恒例の組合忘年会を兼ね昭和四十三年度受彰者六名に対する祝賀会及び記念品贈呈を組合会議室にて行い盛会裡に終了した。

◇一月四日午後一時より東京薬業会館に於いて、東京医薬品工業協会、東京医薬品卸協同組合、東京薬貿協会、東京都家庭薬工業協同組合、四団体共催による会員年頭賀詞交換パーティーを開催、組合関係会員二十三名が出席午後三時盛会裡に終了した。

◇一月七日午後三時より日本工業倶楽部に於いて、東西合同新年互礼会を開催し、出席会員二六六名に達し、午後六時盛会裡に散会した。

訃報

東京都家庭薬工業協同組合顧問、株式会社竜角散取締役会長、藤井得三郎氏は心筋梗塞のため昭和四十四年一月十日午前十時〇五分御逝去されました。

葬儀は一月二十二日午後一時より午後二時、告別式は一月二十二日午後二時より午後三時

青山葬儀所で執行されました。

各薬業界だより

第二十七回東京家庭薬軟式野球大会は参加チーム二十一チームにより十一月十日神宮外苑グランドに於て熱戦の火蓋を切り十一月二十四日左記戦績を以って盛会裡に終了した。

優　勝　太平化学製品株式会社
準優勝　株式会社鎌田商会
三　位　大木製薬株式会社
三　位　小林製薬株式会社

東京薬友会主催第六回囲碁大会を十一月二十四日午前十時より薬業健保会館で十五選手が参加して和やかな試合を行い左の戦績を以って午後五時盛会裡に終了した。

A組
一等　二段　小口喜三郎殿
　　養命酒製造株式会社
二等　初段　森　勇吉殿
　　川手商事株式会社

B組
一等　四級　河原　徹殿
　　養命酒製造株式会社
二等　四級　清水　克悦殿
　　川手商事株式会社

(後)記

曩に湯浅前理事長の追悼文を掲載し、本号には又藤井顧問の生前の遺徳を偲ぶ文章を掲載することになり、ひしひしと寂寥の思いに沈んでおります時に、又々大木理事の訃を知って驚がくし、人生の無情がこの様に重なることに恐ろしさといきどおりを覚えます。

組合の創成期から、その発展と変動とのあらゆる現象に最も大きな影響を与えてこられたこれらの先人たちが、それぞれ強烈な個性を持っていられて、それが業界全体のイメージをさえ作っていたように思われます。

業界はこの数年、非常な波瀾の中にあり、業者は体質改善に追われています。理事長の巻頭言にもあるように、我々はお互いに助け合い、補ないあって発展すると同時に、業界の民主的な運営によって一層団結せねばなりません。

一般薬が大衆の動向に背を向けたらおしまいです。取締り当局の指導針方も、愛される医薬品づくりを奨めているのです。亡くなられた先人がいずれも、自他の別なく業者を指導されたことを特に想い起し、大衆への奉仕に務めて、志に添いたいものです。

(ほ)

東京都家庭薬工業協同組合会報
かてい やく 第十三号
昭和四十四年三月十日　発行
編集・印刷・発行
東京家庭薬工業協同組合
東京都中央区銀座東八丁目十五番地二
電話（五四三）一七八六